

展覧会情報

平野七濤

(元 上越教育大学教授)

今頃(5月上旬)の上越は、自然が最高に輝いていることでしょう。南葉山、そして遠くには雪をかぶった妙高が姿を見せている若葉の高田公園、山屋敷キャンパスでは、若葉や木々は噓せ返るほどに鼻をつき、自然はもっと野性的です。

上越を去ってから5年になりますが、ここ東京にはこのような自然の恵みは、残念ながら望むべくもありません。もっぱら人間の手になる第二の自然を、つまりはコンサートや展覧会に出かけて日をおくっている、という次第です。以下に、この春に見た展覧会3つを、ご紹介してみます。

まず特筆すべきは、エル・グレコ展(東京都美術館、1月19日—4月7日)です。大画面の油彩画、テンペラ画が51点も集められた本格的な大回顧展です。グレコ(1541~1614)の作品は、日本なら大原美術館で、ドイツに出かけた折には各地の美術館で、かなり見ており、したがってこの画家については、ある程度知っているつもりでした。けれども、このような数をまとめてみたのは初めての経験で、そして私は、グレコの本質をまったく捉えてはいなかったと、思い知らされました。

今回グレコの画面でもっとも感動させられたのは、そこに漲る真の意味での「宗教性」でした。もちろん散発的にその作品を見ていたときも、グレコは、宗教とは切っても切り離せない画家である、とは感じていました。しかしそれが、ここまで徹底しており、強力に画面全体を統べているとは、うかつにも認識していませんでした。

ルネッサンス絵画をフィレンツェやローマで学んでいたグレコが、スペインへ渡った(1576年頃)のは、国家を挙げての反宗教改革のキャンペーンのさなかにあった、カトリックの大国スペインで、彼の画家としての腕を存分に振るうためでした。つまり絵画において、宗教性という要因をさまざまな形で強く押し出すことは、当時の画家たちに要請された、いわば時代的、社会的なニーズであった、とあってよいでしょう。多分当時のスペインでは、数多くの「宗教画」が、この

ような外的な要請にこたえて、制作されたことでしょう。しかし、グレコの場合のように、この外からの要請が、画面を深い基盤において規定する内発的な要請になりえている絵は、多分そうたくさんは無いことだと思います。

グレコの作品は、どれも、この画家自身の中の極めて自発的な宗教性、つまり、超越的なものへの強い思いに支えられています。そうでなければ、見る人の心を圧倒的に拉致するような強い画面にはならなかったろうと思います。私は、この展覧会に展示された 51 の彼の作品を、唯唯驚き、圧倒され、心を完全に奪われて、ひとつひとつ観照しました。

旋回するように上へと長く引き伸ばされた、あの特徴的な天使像や人体は、まさにより高きものを求める画家の精神の熱い焦燥の表れと受け取れます。ゴシック様式の尖塔についてよく言われる「天上を志向する垂直効果」を、グレコもまさに効果的に、ほとんど強引といっても良いほど徹底的に駆使している、ともいえます。

このような志向性に基づくグレコの作品は、構図に関しては、画面を斜めに切る対角線を基調とする、運動性のあるバロック絵画独特の開放的な構成を、画面いっぱい展開しています。私たちがどの部分に目を向けようと、その視線が退屈することはなく、隅から隅まで緊張度の高い、気品に満ちた世界が私たちの目を捉えるのです。

色彩に関しては、全体として暗い色合いですが、天使や聖母マリアの衣服など、かなり鮮やかな色が使われており、その色そのものが、それを纏う人の心のありようや境涯を直接私たちの胸に訴えかけてくる感があります。たとえば、「聖衣剥奪」のキリストが纏っている輝くような赤、「受胎告知」のマリアの光るピンクの衣と上に羽織っているマントの柔らかいブルー、マリアと対する天使の深いグリーンの長衣。世俗の絵の「白テンの毛皮をまとう貴婦人」では、夫人の肩から胸をおおっている毛皮の白と、髪を包んでいる布の白は、この描かれた女性の気位の高さと潔さの、まるで証であるかのように、見る者の目に鋭く、しかし快く突き刺さります。

画面は、既述のように、全体として暗いのですが、その分、光の効果にはすばらしいものがあります。「聖衣剥奪」では、キリストのまとう衣の燃えるような赤とキリストの天を見つめる鋭いまなざしがくっきりと描かれている顔の部分は、キリストを囲み擲揄したり、糾弾する人々が、黒っぽい色で縁取りされ、暗い色調であるだけに、際立って明るく、この世ならぬものの顕現を感じさせます。

そして「受胎告知」では、相対峙するマリアと天使の間に、天から精霊を象徴する白い鳩が、光を放って急降下してくるのですが、この眩い光が、マリアの顔とピンクの服の前面、対峙する天使の顔と広げた翼の真ん中をまるで稲妻のように照らし出し、聖別しています。この場合も、この光の明るさは、ほとんど黒に近い紺を主体として描かれる背景や周囲のものとの対比で、極めて効果的に働いています。

以上のように、グレコの作品は、圧倒的な力で見る者をこの画家自身の高い意欲に基づいた崇高な世界へと連れて行きます。私がこの会場にいたのは、ほんの 2 時間足らずでしたが、出てきたときは、何かまったく別の世界へ行っていたような感じでした。

さて次に、**ラファエロ展**(国立西洋美術館 3月2日—6月2日)について書きます。

この展覧会は、ラファエロ展と銘打たれてはいますが、純粋にラファエロ(1483~1520)の手になる作品は数点で、他は何らかの形でラファエロと関係がある他の作家による作品が展示されて

おり、その点では、上述のエル・グレコ展の場合のように、最初から最後までラファエロの世界を堪能し、圧倒されたという経験は、残念ながらできませんでした。

ここに展示されていたラファエロの作品は、「大公の聖母」という大きな作品を除くと、あまり知られていない、小ぶりの地味な絵が殆どでしたが、そこにもラファエロの筆の特徴は紛れもなく見て取れて、そのような点で、とても興味深かったといえます。

ラファエロの絵の第一の特徴は、物を描き出す時の、その線の驚くほどの精確さです。その意味で、ラファエロの線は、絵全体の印象としてはむしろ柔らかくやさしい感じがあるにも拘らず、極めて鋭く、強いと私は思います。この展覧会の数点の彼の作品においても、そのことを確認しえたと思いました。ここに並べられていた、他の作家による同じような主題の作品と比べても、ラファエロの線の抜きん出た精確さ、鋭さ、強さは、歴然としている、と感じました。

先日テレビであるアーティスト(=漫画家)が、ラファエロの絵を模写するのは、一見やさしそうに見えて、実際やってみると凄くむずかしい、彼の線は、1ミリのほんの数分の1でも狂うと、全体がまったく別の絵になってしまう、という意味のことを言っていました。ラファエロの描く線は、それほど正確に、それ以外にはありえない精確な線をきっちりと捉え切っている、とでも言ったらいいのでしょうか。しかもそのような精確な線を、何の迷いも、試行の跡も残さず、あたかも一筆書きでも書くように、さっと描いている、と少なくとも見る者には感じられるのが、また驚くべきことだと思います。

実際、この展覧会においても、ごく初期の作品、ハンチングのような帽子をかぶった、かの有名な斜め横向きの「自画像」、「無口な女」などにおいても、おずおずと線を引き、試行錯誤の末に精確な線にたどり着くといった、努力の痕跡は一切感じられないといってよいと思います。一発で、一気に、こうでしかありえぬ精確な線を探り当ててしまっている、ということが、題材としては、聖母マリアや幼児キリスト、天使といった華やかさや優美さが無いこれらの肖像画、あるいは自画像では、むしろありありとわかる、といっても良いかもしれません。これはまさに、ラファエロが天才であることの証というべきなのかもしれません。ちょうどモーツァルトの音楽に、ベートーヴェンの場合のように苦しい努力の跡が一切感じられないように、です。

イタリア盛期ルネッサンスを代表する3人の画家として、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、そしてラファエロが挙げられますが、ダ・ヴィンチは絵画のみならず、自然科学、土木建築、また兵器の設計なども手がけており、それゆえ当時の政治にも深くコミットしていた、万能の天才であり、元来彫刻家であるミケランジェロの絵画は、物を3次元において捉え慣れた人特有の、太さのある独特な魅力ある画面を描き出しますが、彼もまた、苦難にぶち当たり、それを乗り越えることにより新たな展開を成し遂げた偉大な努力の人であり、巨人であるとロマン・ロランは書いています。

すると、事を純粋に2次元の世界としての絵画の分野に限るとすれば、一番の天才と言われるべきは、このラファエロであった、と言えるのかもしれません。

さて3つ目の展覧会は、エル・グレコと同じくバロック画家として括られますが、グレコより2世代ほど若く、生まれも北方のフランドル、今で言うベルギーのアントワープであるルーベンス(1577~1641)の展覧会です(渋谷 Bunkamura 3月9日~4月21日)。

この展覧会も、必ずしもルーベンスの手になる作品ばかりが展示されていたわけではありませ

んでしたが、ラファエロの場合よりはルーベンス自身の作が多く、また私は、これまでもいろいろな機会にルーベンスの作品はかなり親しんできたので、大画面のものはありませんでしたが、それなりにルーベンスを楽しめたという感じです。

同じくカトリックの国、フランドルの画家であっても、ルーベンスの作品には、グレコについて先に述べたような意味での強い宗教性は感じられませんでした。もちろん立派な宗教画は彼にもたくさんありますし、この展覧会でも「キリストの復活」と題される、復活したキリストの精悍な輝く肉体が中央に描かれ、その左上をかわいらしい天使が飛び回り、右側では赤い服を着た若い人物がキリストを支えている、という生命感あふれる、華やかな作品がありました。

しかしこの画家の関心は、グレコのように求心的に激しく天上的なものを志向し、表現することにあるよりは、この現実の生の豊穡、華麗を描き出すことにより多くあったのではないかと私には思われます。人間の生のもつ喜びや悲しみ、美しさや躍動を、宗教画や神話画という枠によって、あるいは同時代の風俗画として、まことに美しく、生き生きと奔放に描き出したのが、ルーベンスの作品である、と私は感じています。

そしてその際、付け加えねばならぬことは、彼の場合、まことに奔放に、恣に描いているようでいて、どこかに必ず一種の節制、節度とも言うべきものがあり、それが彼の絵画に、なんとも言いがたい気品を与えている、ということです。この展覧会に展示されていた彼の作品、「ヘクトルを打ち負かすアキレス」、上述の「キリストの復活」、「ロムルスとレムスの発見」、小画面ながら佳作の「ヘラクレスと愛犬」などにも、私は、ルーベンス独特の、この心躍るような奔放さと同時になんとも言えぬ気品を充分に感じ、大いに楽しみました。

同じような主題で、同じような手法で描きながら、時としてこの節制に少し欠けるところがある、と思われるのが、ルーベンスの弟弟子のヨルダーンズの作品であり、「ルーベンスの絵みただが、なんだか少し品がないな」と思うと、ヨルダーンズの作品だったことが、以前に何度かありました。この展覧会にも一点ヨルダーンズのものがありました。やはり同様な感想をもちました。

逆に節制が、画面の奔放さをかなりセーブしていると思われるのが、ルーベンスの一番弟子、ファン・ダイクの作品で、彼の作品には厳しいといつていいほどの品位が感じられます。今回展示されていた彼の3作品、「若い男の肖像」、「改悛のマリア・マグダレーナ」、そしてかなり年若い男の肖像においても、私は、描かれた3人物の、それぞれに抱える苦悩や悔悟の表情の中に、そして画面全体に漂う侵しがたい気品に実に心打たれる思いをしました。

さてルーベンス自身の絵に話を戻せば、私は今回の展覧会で、ルーベンスの線のもつ意外なやさしさに驚きました。それは、上に述べたラファエロの線の明快さとは対蹠的な線のあり方です。ラファエロの線が1ミリの数分の1という狂いもなく、見事に正鵠を得た自信に満ちた強い線だとすれば、ルーベンスのそれは、少しアバウトな、むしろおずおずと言ってよい程やさし気に引かれた柔らかい線である、ということです。

このような強い線により構成されているラファエロの絵は、やさし気なマリアの表情や愛くるしい天使というモチーフの雰囲気により、全体としてはいかにもやさしく柔らかい印象を与えるにも拘らず、絵の構成、構造的という点から見れば、実に揺るぎない強さと明快さに満ちた画面である、と私は思います。ところがルーベンスでは、逆に、女レスラーとも見紛うばかりの女性の裸体像の豊満さ、あるいは戦う男たちの体が示す筋肉、また優れた運動性など、モチーフ

のもつ豪快さや華やかさにも拘らず、上述のようなやさしい線によるその構造の特質は、明快で形式性に富むというよりも、むしろ柔らかい曖昧さであり、やさしい神秘性である、と思われま

す。
それはもちろん、ルーベンスに精確な線が引けなかったという技術の問題ではなく、数分の狂いもない精確な線を引くということに、ルーベンスの美意識が向かわなかった、ということだと思

います。
この相違は、ラファエロとルーベンスという画家個人の好みの問題であり、そして又ここに、物の輪郭のはっきりと浮かび上がる強い太陽の下に、明確に物の形を捉え、描き出そうとする南国(=イタリア)の画家の指向性と、北国の弱い光の下に、物の形そのものよりも、物の存在そのもののもつ神秘、不思議に心を取られがちな北の画家の指向性の違いも窺がえるのではないか、などと考えながら、私は、ルーベンス展の会場を後にしました。

『一度しかない人生を・・・』

大学院 2 年 言語系コース (英語)

佐藤大輔

私は大切にしていることが 2 つあります。

まず 1 つ目は、「出会い」です。生まれてから現在に至るまで多くの人との出会いがありました。まずは、一生付き合っていく家族。そして保育園から現在の大学院での仲間。世界中には何十億という人がいます。その中で出会える人は限られているので、私は今まで出会ってきた人やこれから出会う人を大切にしようと考えています。

「人」という漢字は、支えあって成立します。それと同じように、人間も支え合いがないと生きていけないと思います。私自身も、今まで多くの人に支えられ、助けられて成長してきました。部活で良い結果が発揮できなかった時、受験に失敗した時、進路に悩んだ時など、もし自分 1 人しかいなければ……。教師という職に就くことを目指すきっかけとなったのも、中学校、そして大学の時に出会った先生の影響でした。

「人生はネットワーク」。出会いはどこかで必ずつながっていると思います。私は今、小・中学校で同級生だった仲間の紹介で、ある草野球チームに所属しています。そのチームのほとんどの人は初めて会う人ばかりでした。しかしその中でも、楽しく自分の大好きな野球をすることができています。大げさかもしれませんが、1 人と知り合うことで、その人の多くの仲間と知り合うことが可能になるのです。それにより、視野が広がり、多様な人々から刺激を受け、さらに自分の成長を促進すると考えています。「出会い」は自分に影響を与えるものなので、今後も大切にしていきたいと思います。

2 つ目は、「自分の可能性は自分で広げる」ということです。私は、一度しかない人生で、自分にできることや何かをするチャンスをもたらした時は、挑戦しようという意識でいます。つまり、「イエスマン」になるということです。今年から中学校の非常勤講師として現場の子どもたちと一緒に英語を学んでいます。今まで学んだことを還元するチャンスを頂いたので、どんな困難が

あっても最後までやり遂げるという気持ちを持ち、未熟ではありますが受け入れました。その結果、多くの気付きや学びがあり、さらに視野が広がりました。また、先生方、生徒、保護者、地域の方との出会いもあり、とても充実した日々を送ることができています。

人間は、自分で勝手に限界をつくってしまう傾向があると思います。私もその一人でした。目標を決めたらそこで終わりということがよくありました。しかし、その目標を達成し、そこで満足せずにもう少しやってみようと頑張ると、大きな力を得ることができることに気付きました。現在は中学校と大学を往復する日々を送っていますが、大変さは全くなく、反対にとっても楽しいです。

これらの大切にしていることを、今後も忘れずに生きていきたいと思います。また、将来の生徒になる子どもたちにも、ただ生きていくのではなく、個人の大切なことやこれだけは譲らないということを見つけて、自分らしく、素晴らし人生を送ってもらいたいと思います。

進む

大学院 2 年 言語系コース（英語）

田中 修平

大学院に来て 2 年目、充実した日々を過ごしています。せっかくこうした機会をいただいたので、なぜ今自分がこうして大学院で学んでいるのか、そして今後どういう教師になりたいのかを薄っぺらですが再び考えてみたいと思います。

「教育」ということにはずっと興味がありました。子どもが好きですし、人に何かを教えることは苦手ではなかったからです。そのため、学部時代は塾でアルバイトをしていましたし、就職活動も教育業界の企業を中心にこなしていました。ただ、その頃の自分は、教育については、「教師が生徒に教えるもの」という認識しかなかったのかもしれない。

そんな自分の浅い教育観に、別の見方を与えてくれたきっかけがあります。それは学部時代のゼミで学んだ、フィンランドの教育制度です。（正直、学部時代はちゃらんぼらんだったため、実際これも薄い内容ではあるのですが…）フィンランドの教育制度は、よく競争をさせないということで知られています。それは子どもたちが自ら何かを「知りたい」、「やってみたい」を追求できる環境を整え、子どもたちの個性を引き出すことができるものであると感じました。このことが自分に本当の教育を教えてくれたと思います。

それまでテストの点数争いや受験戦争など「普通」と感じていたものに嫌気が差し、そんなことに力を入れる仕事なら興味が無い、と就職活動を止めました。そんな時期、この先どうしようかと考えていた時に見つけたのが進学という道でした。学校の先生になれば、自分のやりたい「生徒が自ら学ぶ教育」、「生徒の個性を引き出せる教育」を少しでもできるかもしれない。そんな期待から始まった大学院生活でした。

英語の先生を目指したのは、私が中学生の頃の修学旅行で外国の方に道を聞かれた時、しっかり受け答えができた喜びを覚えており、英語が好きだったから、そして自分の授業の結果、そういう体験をさせられたり、世界に飛び出すきっかけを与えたりできればと思ったからです。

大学院では、ゼロ免ということで何も知識がなかったため、授業の多さ、周りの人たちとのレ

ベルの違いなどで1年目は非常に苦労しました。ただそんな大変な生活でしたが、どの授業もすべて自分の力に変わっていると感じられるし、周りの人たちと切磋琢磨して成長していける環境がだんだん心地良いと感じるようになりました。

2年目の今年は、5月に中学校での教育実習も終え、最近は確実に教師への道を進んでいると感じている毎日です。身につけた知識も増えましたし、教育現場での実践も少し積むことができたので、今後は理論と実践を結びつけることを常に意識しながら、またこれから未来に向けて勉学に励みたいと思っています。

最後に、私は学部時代、1人の先輩と約束を交わしました。「後悔のない選択を」という約束です。約束を交わした2ヶ月後の2011年3月11日、その先輩は震災で亡くなりました。私は先輩が生きられなかった未来を生きています。そしてもっと遠くの未来には無限の可能性を持った子どもたちが待っていると思います。あの時交わした約束を忘れず、未来で待っているであろう子どもたちに、私も後悔のないように全力で向き合えるような、そんな準備を残りの大学院生活でしていきたいと思っています。

Truth is Linear

大学院3年 言語系コース（英語）

木戸 一平

テキサス留学時代に何かの縁でハウスシェアをすることになったのは、同じ学校に通う文学や哲学専攻の院生たちであった。彼らとは10ほども歳が離れていたが、音楽と映画という共通の趣味があったこともあり打ち解けるのに時間はかからなかった。Châteaux Weirdosと名付けた築150年の2階建ての青い家は、年中誰もが自由に出入り出来るようになっていて、夕食時にはどこからか知り合いが数人訪れ、自然と宴が始まるのであった。ある人はタバコとビール瓶を、またある人はギターとワインの瓶を片手に、ジョイスやウィットマン、サルトルやデカルトなどについて好き勝手に“演説”し、それぞれが独自のスタンスから議論する。もちろん彼らの熱の入った主義主張など半分ほどしか聞き取れず、また内容も難解だったので、私は一言二言コメントするばかりで、後はただ座っているだけであった。しかし、酔っぱらった哲学者たちは、眉間に皺を寄せながら頷く私を寡黙で思慮深いと一方的に解釈していたらしく、すこぶる上機嫌で一層熱く語りかけてきた。分からないことばかりで自分の知識の無さを毎回実感させられたが、不思議と嫌な気持ちでは無く、逆にそれを心地良いと感じた。何を学んでいるのか、目的は何かなど考えることなど無く、ただ単に周りにあるもの、酔っぱらいの語る文学、哲学論、音楽や冗談、ダンスの仕方を吸収していった。大学時代を思い返せば、友人と明け方まで語り合っているだけで勉強という勉強などほとんどせず、間違いだらけの英語や場所柄、文化をわきまえない行動で周りにずいぶん迷惑をかけてばかりであった。

母語に頼ること無く生活しなければいけない環境に置かれると、相手が何を伝えたいのか、またどうすれば自分の意思を伝えられるのかを考えることが多くなる。計7年間の海外生活においては、自分が伝えたいことを伝えられない、相手が言いたいことが分からない状況が当たり前で

あり、だからこそ自分の置かれている状況や、周囲から期待、必要とされている役割、相手が何をどういう意図で発信しようとしているのかを考える習慣が自然と身についたように思える。そのいわば副産物的なレンズを通すと、国や文化、ノームの存在を踏まえながらも、それに囚われることの無い人やモノの在り方を嫌でも見ることになる。以前の自分は、海外にいるのに生まれ育った自国の文化に必要以上に固執しようとしたり、反対に新しい文化に同化するために自分の生まれ育った文化を全否定しようとしたりというように、自己のスタンスをとることが出来なかった。その結果、立場を取らずに他を批判することでその場限りの優位性を証明しようとしたり、事なかれ主義で保身に走ったりした。また、自分の努力が報われないと感じ、ある種のコンプレックスを持ってしまったり、無関心を装いながらもつつい他人の評価を自分の価値観に摺り合わせてしまったりもした。しかし留学を通じて、スタンスをとること、「自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の頭で考えることが基本」ということを確かに学ぶことが出来たと思う。

とりとめも無い昔話を無理矢理教育に繋げると、英語という教科がもつ特質性、即ち言語そのものだけでなく、その背景にある異国の文化や思想といったものをどう扱うかを良く考える必要がある。単なる知識科目としてではなく人と人との繋がりを基に、などと言えば聞こえは良いが、英語教師の役割を考えた際、表面上の正しい言語知識だけを教え、定着させ、後は生徒に委ねることが正解なのかもしれない。しかし私は、学校は間違いをおかすことの出来る場であるべきであり、一人ひとりの生徒がその間違いから何を学ぶかが大切だと考える。もちろん間違いを奨励しているのではなく、学ぶためには間違わなければいけないと主張しているのでもない。スペルミスから発音ミス、言葉遣いや対人関係から生じる葛藤、軋轢など、その大小に関わらず、失敗を必要以上に恐れない気持ちと自身の間違いを認められる心、そして他者の誤りを寛容し、許せる器の育成を図りたい。



オオルリ

校長の眼 ～つぶやき・うたかた～

連載 第9回

再び学校行事について考える～修学旅行の引率から学ぶ～



苫小牧市立明野中学校
校長 佐々木郁夫
(平成4年度修了生)

本稿は昨年の同時期に発行された本紙「学校行事について考える」の続編的な意味合いが濃いため、二番煎じに陥らないよう私なりの考えを述べます。

4月から苫小牧市内で校長として4校目となる^{あけの}明野中学校に勤務しています。簡単に学校紹介をさせていただきます。校区は苫小牧市内の中東部に位置し、自動車ディーラー、大手スーパーやホームセンター、家電量販店、家具店、紳士服店などが林立する一大商圈を形成しています。開校は平成4年4月1日、新興住宅地として人口増が続きましたが、この数年来新入学生徒数は減少の一途をたどり、現在では最盛期の半数以下となり、今年度は8学級、生徒数246名の小規模校です。学校は落ち着いた環境の中で生徒は明るく元気に登校し、学習態度は良好であり、卒業後多数が希望する進路を実現しています。保護者の教育的関心は高く、昨年実施した保護者評価を見ると設問の「わかりやすい授業が多い」「学習に関して子どもの能力や努力を適切に評価している」に対してA B C Dの4段階のうち、AとBを回答した保護者が前者では82%、後者が94%となっています。このように本校の実践へ温かいまなざしと期待が寄せられています。

さて、今年は5月に3年生88名を引率して東北地方への修学旅行を行いました。今年度苫小牧市内14中学校中10校が東京方面へ航空機を利用して2泊3日の旅行を企画し実施しました。本校のような東北地方を旅行地に選定する学校は年々少なくなる傾向にあります。東京（横浜、鎌倉方面も含む）を志向する理由として政治経済文化の中心である首都圏を訪問できること、航空機を利用することで目的地へ速やかに到着することができること、生徒の疲労や健康面を配慮できること、さらに年間の授業時間数を確保する観点から従来の3泊4日を避ける傾向等が挙げられます。

昨年の拙稿でも触れましたが、修学旅行は中学校生活の中で最も思い出に残る貴重な体験をする機会となります。本校では一貫して青森県内で2泊3日のファームステイを行い、受け入れ農家で農業体験と宿泊をしています。ここで唐突ですが、津軽平野の真ん中で、今の時代に忘れ去られたあるいは捨てられた真心や人情、誠意の大切さを教えてくださった平川市尾上地区の方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。3泊目は帰路である苫小牧港を活用する意味から豪華フェリーを体験させています。苫小牧市は太平洋に面し、北海道の空と海の表玄関と言われ、北海道の中で空路と航路の両方を利用できる唯一の立地条件に恵まれています。

今年度、本校では5月9日に出発し、青森県平川市で2泊3日のファームステイの後、世界遺産に登録された中尊寺を見学し、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町を訪ねました。雨の中、バスの車窓からかつて住居が並んでいた痕跡が残る地区が見えました。さらにテレビなどでも大きく取り上げられた防災対策庁舎が鉄骨だけの無残な姿になっていました。ここに住民に必死の避難の呼びかけをしたまま二度と戻ってこなかった防災無線の声の主がいたと思うといたたまれない気持ちになりました。南三陸町では家を失っただけでなく兄、姉を亡くした女性の講話を聞きました。着の身着のまま避難し、水や食料が不十分で、入浴はもちろん歯を磨くことすらできない日々が続いたそうです。私たちは言葉もなく、今こうして元気でいられることの幸福を感じました。その後、復興さんさん市場で買い物をし、一路仙台港へ向かいました。3泊目、生徒にとって豪華フェリーでの旅はこの上もない経験となりました。夕食はバイキング形式でステーキ、寿司をはじめとする豊富な和洋中のメニュー、デザートのアイスクリュームやケーキ類、各種ソフトドリンクが食べ飲み放題でした。みんな大喜びでおかわりをしていました。以前チーフパーサーの方が生徒たちに「皆さんは素晴らしい体験をしています。船の旅が一番贅沢なのです。なかなか中学生でできる旅行ではありません」と話をしていました。ところが、満腹の食事を終えて船室へ戻ってから悲劇の幕が開かれます。彼ら彼女らが生まれて初めて経験する“船酔い”に見舞われました。まさに空前絶後、身動きができないほどの苦痛を味わいました。この日の航海は大揺れはなかったのですが、それでも揺れを体感し、中には嘔吐して翌日の朝食に來られなかった生徒もいました。大変気の毒でしたが、私は通路を飛び上がるほどの縦揺れや横揺れがあっても全く気にならないので、実際の苦しみを形容する適切な言葉が見つかりませんでした。生徒には申し訳ありませんが、これも体験重視の旅行がもたらした他校では味わえない副産物、成果の一つと考えてもらいましょう。

今回の旅行を終えた生徒たちのレポートの中からいくつか紹介しますので、お読みください。

○ ファームステイはとても良い経験、思い出になった!!!短い間だったけど家族の様に過ごすことができてよかった。農作業や料理などとても楽しかった。お別れの時に号泣した。ずっと涙が止まらなかった。ファームステイして本当によかった。

○ 3日目、いよいよお別れの日…短かったのにとても濃かった2日間でした。離村式で「あなたへ」を歌っている時からちょっとウルウル…「ふるさと」でボロボロ。最後に握手した時はもう…。バスに乗ってからもずっと見送ってくれていて、「絶対にまた来るからね!」と約束しました。

○ 南三陸町で被災した方から講話を聞かせていただいたが、想像するだけで怖く、悲しくなるようなお話がたくさんでした。改めて今自分が普通に生活できていること、家族の誰一人欠けることなく生きていられることは決して“当たり前”のことではないんだと実感しました。

○ 宮城県南三陸町では辛いことがあっても頑張り続ける姿を見て、私も強い大人になりたいと思いました。本当に修学旅行に行けてよかったです。

○ 明野中は他校とは違い、東京ではなく東北に行きました。周りの人の多くは「東京がよかった」と言っていましたが、僕は東北の方がいいと思います。東京は大人になってから行けばいいです。ファームステイをすることは中学生の今しかできません。だから僕は東北に行けてよかったと思うし、とても良い体験ができたと思います。

○ 正直最初は「東京がよかった…」と思っていたし、修学旅行もあまり楽しみではなかつ

た。でも今回東北に行ったことで他中学校の人にはできないような経験をして、帰ってきてからは「やっぱり東北でよかった」と思えるようになった。

○ 1日目、2日目は青森の人の温かさが感じられ、3日目は中尊寺の凄さや震災の恐ろしさが改めて分かり、そのことが起こった場合、僕はそのことに直視できないと思う。東北の人の強さも感じる事ができた。修学旅行で東京へ行く学校が多いらしいが東北へ行って感じてもらいたいとも思った。

上記では紹介していませんが、多くの生徒が東北地方での修学旅行を通して得た経験や学んだことを今後の生活に生かしたいと言っています。今回の旅行は本校生徒に大きな教育効果をもたらしました。現在、明野中学校ではナンバーワンスクールを目指して生徒が学習と生活の両面で自信を持てるよう頑張っています。一回り成長した3年生の今後の活躍に期待を込めて本稿を終わります。

原稿と感想・ご意見の募集

JAELEN では皆様の原稿を随時、募集しております。皆様の近況報告、エッセイ、上越時代の思い出、英語教育に関する話題など、お好きなテーマでエッセイをお寄せ下さい。お問い合わせはJAELEN 編集部（北條、野地、飯島：e-mail: iijima-hiroyuki@spu.ac.jp）まで、ご連絡ください。

編集後記

今回、冒頭のエッセイを投稿して下さった平野七濤先生ですが、上越教育大学在任中は長くドイツ語をご担当になり、言語系コース（英語）の院生とも親しくお付き合いしていただいた先生です。JAELEN の愛読者のお一人と編集者は勝手に決め付けていますので、今回ご投稿をお願いいたしました。充実した日々をお過ごしの様子が行間から伝わってきました。

さて、先日、琉球大学において小学校英語教育学会が開催されました。上越教育大学の修了生であるM先生、H先生の発表もあり、発表を終えたお二人と一緒に琉球料理を味わう機会にも恵まれました。オリオンビールを飲むお二人の表情は発表を終えた充実感で満ちていました。私自身もかつて県立高校の教育現場で忙しい日々を送る一方で同様の生活をしていましたので、お二人の日々の御苦勞や研究発表後の心境をある程度共有できると感じています。お二人とも上越英語教育学会でお知り合いになった方々ですが、私にとって、本学会で面識のある方々が教育現場での実践や研究を発表される姿を目にすることは、大きな喜びであると同時に刺激ともなっています。

（編集委員 H. I.）

2013年7月22日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）
